これでいいのかも知れない

帰り、僕はいつも、疲れて、ボーとしながら電車にゆられている。
電車で、コックリ、コックリ眠ることも多かった。
時々、寝過ごして、中書島を通り越した。
八幡町に電車が近づくまで寝込んでしまった。

やっと、宇治川と木津川の二つの鉄橋を、電車が渡る時目が覚めた。
ゴーゴーする音に起こされて、僕はびっくりして、
乗り過ごしに気付き、次の八幡町の駅で電車を降りた。

あの子が乗り降りする八幡町の駅である。

暗い、駅の地下道をくぐり、
逆方向のプラットフォームへ回って、
僕は引き返えした。

そんな時、僕は、
「これが、あの子が乗り降りする駅か。」
と、駅の様子を細かく観察した。

そして、そばのベンチに、あの人が座って
電車を待っている様子を想像した。

もう、まわりは真っ暗で、とてもさびしい思いだった。

「僕がこんな気持ちでいることを
　あの人は夢にも思っていないことだろう。」
その気持ちをどう伝えたらいいのか僕は悩んだ。

103 これでいいのかも知れない・・・・・・・・・・452

萩原良昭